

大学生の過去のいじめ経験に関する研究 母子関係・仮想的有能感・自尊感情の関連

著者	松平 泉, 蘇 亮, 高木 聖実, 前田 瑞穂
雑誌名	東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要
巻	5
ページ	107-120
発行年	2019-03
URL	http://hdl.handle.net/10097/00125317

【論文】

大学生の過去のいじめ経験に関する研究 —母子関係・仮想的有能感・自尊感情の関連—

松平 泉^{1)*}, 蘇 亮²⁾, 高木 聖実³⁾, 前田 瑞穂⁴⁾

1) 東北大学大学院医学系研究科医科学専攻加齢医学研究所 機能画像医学研究分野

2) 東北大学大学院文学研究科人間科学専攻 行動科学分野専攻

3) 東北大学大学院農学研究科資源生物科学専攻 水圏植物生態学分野

4) 東北大学大学院理学系研究科物理学専攻

小中高等学校におけるいじめの認知件数は増加しており、いじめ被害を苦にした自殺が後を絶たない。いじめ根絶の実現には、いじめという現象の背後にある心理学的なメカニズムの解明が不可欠である。先行研究により、自尊感情と仮想的有能感がいじめ経験に関わる心理特性であることが明らかにされてきた。さらに、自尊感情と仮想的有能感の形成には母子関係が影響することも指摘されている。本研究は母子関係と仮想的有能感、自尊感情、いじめ経験の関係性を明らかにすることを目的とし、大学生・大学院生を対象とした質問紙調査を行った。二項ロジスティック回帰分析の結果、母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情が主にいじめの被害経験と無経験に関与することが明らかとなった。本研究の結果から、いじめという現象を理解する上で母子関係・仮想的有能感・自尊感情の重要性が示唆された。

1. 緒言

1.1 背景

日本では、いじめ加害・被害の報告が近年増加している。文部科学省による小中学校、高等学校ならびに特別支援学校におけるいじめ認知件数は平成29年度に41万4378件となり4年連続で増加し、昭和60年の調査開始以来過去最多を記録した（文部科学省 2018: 70）。平成30年5月には熊本県立高校に通う女子生徒がいじめをうかがわせる遺書を残して自殺し（朝日新聞 2018a）、同年6月にも新潟県の男子高校生のいじめによる自殺が報告されており（朝日新聞 2018b）、いじめ防止対策が切望されている。

いじめ経験が生涯に渡って経験者に損失をもたらす可能性も報告されている。いじめ被害は幸福感や Well-being の低下をもたらす（小西 2004: 19-25; 坂西 1995: 105-115）、その後の心身状態に影響を及ぼす（坂西 1995: 105-115）。Wolke et al. (2013) はいじめ加害・被害者を両方経験した者ほど、成年初期の健康や対人関係の良好性が低いと報告している。さらに、子どもの頃のいじめ被害経験が50歳時点でのメンタルヘル

ス、社会関係、経済的困難にも影響を与えることも示されており（Takizawa et al. 2014: 777-784）、いじめが解消したとしてもその影響は長期間に渡って継続するといえる。いじめが引き起こすこのような問題を解決するため、いじめという現象の心理的なメカニズムの解明にアプローチする研究が行われてきた。

1.2 先行研究

これまでの研究で、自尊感情と仮想的有能感がいじめ経験に関わる重要な心理特性であることが明らかにされてきた。伊藤・小玉（2005）は小学生の頃のいじめ被害経験が自尊感情を低下させ、いじめ加害者より被害者は自尊感情が低いと報告している。自尊感情が低いほどいじめ被害を受けやすく、加害をしやすくなり（O'Moore and Kirkham 2001: 269-283）、自尊感情が低い中学生女子がいじめ加害に関与することも知られている（Rigby and Cox 1996: 609-612）。また、仮想的有能感が高い者はいじめ経験が多く（松本ほか 2009: 432-441）、特にいじめ加害経験者や、いじめ加害と被害の両方の経験者がその他のいじめの経験者に比

*) 連絡先: 〒980-8575 宮城県仙台市青葉区星陵町4-1 izumi.matsudaira.t8@dc.tohoku.ac.jp

べて高いことが報告されている（今野ほか 2014: 123-131）。仮想的有能感とは「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」のことであり（速水ほか 2004: 1-8）、仮想的有能感が高い人の特徴として、情緒不安定で動揺しやすい、猜疑心が強い、不安を感じやすい、怒りやすい、協調性が低い、共感性が低いなどが挙げられる（山田・速水 2004: 100-101）。松本ほか（2009）は高校生を対象として仮想的有能感、自尊感情といじめ経験の関連を調査した結果、自尊感情よりも仮想的有能感の方がいじめ加害・被害経験に関連することを示した。自尊感情や仮想的有能感に影響する要因として、親との関係性が挙げられる。仮想的有能感が高く、自尊感情が低い人は親との愛着関係が不完全である傾向があると報告されている（丹波・速水 2007）。さらに、大学生を対象として行った調査において、子どもの気持ちを理解しようとする母親の養育態度は子どもの自尊感情と正の相関を示すことが報告されている（豊田・松本 2004: 38-54）。

1.3 本研究の目的

以上の先行研究から、自尊感情と仮想的有能感がいじめ経験の有無に影響を与えるといえる。また、母子関係の質が子どもの自尊感情と仮想的有能感に関与することも明らかである。しかし我々の知る限り、母子関係、自尊感情、仮想的有能感といじめ経験の関係を同一のモデルで検討した例は未だ存在しない。そこで本研究では、母子関係・仮想的有能感・自尊感情の関連および、これらの要因といじめ経験の関係性を明らかにすることを目的とした。18～22歳の大学生・大学院生を対象に、小・中・高等学校時代のいじめ経験と当時の母子関係、現在の自尊感情、仮想的有能感について質問紙調査を行い、「母親の養護性が低く、仮想的有能感が高く、自尊感情が低いほどいじめ加害・被害を経験しやすい」という仮説を検証した。

2. 方法

2.1 調査対象

東北大学と、東北大学大学院に在籍する学生364名を調査の対象とした。このうち、回答に欠損のあった

ものを除外した342名（平均年齢20.04歳、男性267名、女性75名）のデータを分析に使用した。

2.2 手続き

調査は、2017年12月中に行った。協力を得られた三名の大学教員の講義を受講する学生に対し、講義時間内に質問紙調査を実施した。調査は無記名方式で行った。また、結果は調査以外には使用されず、プライバシーは保護されること、回答しづらい項目は無回答で構わないことを質問紙に明記するとともに、教員からも口頭で説明した。回答した質問紙の提出方法は、その場で教員に提出するか、封筒に入れて別の場所に設置した鍵つきの投票箱に投函するかを、選択できるようにした。

2.3 倫理的配慮

本研究は東北大学高度教養教育・学生支援機構研究倫理委員会の承認を得た上で実施した。

2.4 調査内容

2.4.1 仮想的有能感

Hayamizu et al. (2004) によって作成された仮想的有能感尺度 (version 2: ACS-2) を用いた。回答は「全くそう思わない (1点)」、「あまり思わない (2点)」、「どちらとも言えない (3点)」、「ときどき思う (4点)」、「よく思う (5点)」の5件法で行った。全11項目の回答の合計を得点とした。

2.4.2 自尊感情

Rosenberg (1965) による自尊感情尺度の日本語版 (山本ほか 1982: 64-68) を用いた。回答は「強くそう思わない (1点)」、「そう思わない (2点)」、「そう思う (3点)」、「強くそう思う (4点)」の4件法で行った。全10項目の回答の合計を得点とした。

2.4.3 母子関係 (母親の養護性)

母子関係の指標として、Parental Bonding Instrument (PBI) の日本語版 (Parker et al. 1979: 1-10; 小川 1991: 1193-1201) の養護性因子に当たる項目を利用した。PBIは16歳以前に受けた養育を子ども側の視点で評価することを目的として開発された尺度であり、養護性因子と過保護性因子の2因子から成る。養護性因

子の項目は、親から受けた愛着、暖かさ、共感、親密さなどの度合いを測るものである。先行研究（丹波・速水 2007; 豊田・松本 2004: 38-54）により母子間の愛着や共感が自尊感情や仮想的有能感に関与すると報告されていることから、本研究では養護性因子の12項目のみを調査に使用した。回答は「まったく違う（1点）」「どちらかと言えば違う（2点）」「どちらかと言えばそうだ（3点）」「非常にそうだ（4点）」の4件法で行った。全12項目の回答の合計を得点とした。

2.4.4 いじめ経験

我々の知る限り、いじめ経験を問う尺度として十分な信頼性と妥当性の確認されたものは存在しない。そこで本研究では、独自に質問項目を作成して調査を行った。設問は、いじめへの関わり方を加害者・被害者・傍観者・観衆の四つの立場から捉える「いじめの四層構造モデル」（森田 2010: 128-142）に着想を得て作成した。三種類のいじめ行為: ①暴力（殴る、蹴る、叩く）、②悪口・陰口、③無視・仲間外れ、のそれぞれについて、「1. 他人にしたことがある」「2. 周りに流されてしたことがある」「3. 当時はそのつもりはなかったが、今思えばしていたと思う」「4. されたことがある」「5. 当時は気にしていなかったが、今思えばされていたと思う」「6. することもされることもなかった」「7. 周囲で起こるそのような行為を傍観していた」「8. 自分の周りにそのような行為はなかった」の8つの選択肢を設け、当てはまる項目すべてを選択させる方式をとった。また、1.～5.を選択したものについては、経験の相手と、経験した時期を自由記述で回答してもらった（付録参照）。いじめ経験の自覚がない者の回答を得やすくするため、また、「いじめ」の定義が人によって様々であり、学術的にも明確でないことを踏まえ、「いじめ」の文言は使用せず、具体的な行為について設問を設定する形をとった。設問に対する回答をもとに、いじめ経験の有無を分類した。

1.～3.のみを選択した者をいじめ「加害者」、4.、5.のみを選択した者をいじめ「被害者」、7.のみ、あるいは7.と6.を選択した者をいじめの「傍観者」、6.のみ、8.のみ、6.と8.のみを選択したものをいじめ「無経験」とした。なお、質問の対象としたいじめ経験の時期は小学生～高校生時代であった。

2.5 統計解析

はじめに、母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情の関係を単回帰分析によって検討した。次に、二項ロジスティック回帰分析を用い、母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情・いじめ経験の関係性を分析した。上述の通り、本研究では回答者を加害者・被害者・傍観者・無経験の4つの立場に分類した。「加害者」かつ「被害者」など複数の立場をとった者は分析から除外した。この手続きにより、すべての従属変数（加害者経験・被害者経験・傍観者経験・無経験）の選択肢は「加害経験がある・ない」「被害経験がある・ない」「傍観経験がある・ない」「無経験である・無経験でない(何らかの経験がある)」の二値となる。したがって、二値変数を従属変数とした場合の予測値を説明するための統計手法である二項ロジスティック回帰分析を使用することが適当であると考えられる。二項ロジスティック回帰分析に用いた回答数はいじめの種類毎に、269名（暴力）、239名（悪口・陰口）、290名（無視・仲間外れ）であった。 $p < 0.1$ を有意水準とした。

3. 結果

3.1 記述統計

表1に、回答に欠損のなかった342名の年齢、仮想的有能感、PBI、自尊感情の記述統計を示す。

いじめに関する1.～8.の質問項目について、各項目を選択した人数を表2に示す。また、いじめ種類別の加害者・被害者・傍観者・無経験者に分類（「2. 方法」参照）された人数を表3に示す。「その他」には、加害と被害両方の経験がある者などが含まれる。いじめ

表1. 有効回答者342名の記述統計

	年齢	仮想的有能感	母子関係	自尊感情
平均	20.04	26.96	39.78	25.14
標準偏差	4.53	7.32	6.44	4.93

表2. いじめ経験の各項目の選択者数

	設問番号							
	1	2	3	4	5	6	7	8
暴力	75	9	30	71	14	91	68	108
悪口・陰口	114	57	56	66	41	51	77	57
無視・仲間外れ	41	33	23	51	20	84	80	78

(人)

表3. いじめ種類別に分類された各立場の人数

	暴力	悪口・陰口	無視・仲間外れ
加害	42	82	45
被害	19	25	38
傍観	39	40	61
無経験	169	92	146
その他	73	103	52

(人)

表4. 加害・被害者のいじめ経験時期

	暴力		悪口・陰口		無視・仲間はずれ	
	加害	被害	加害	被害	加害	被害
小学校	26	8	36	5	24	19
中学校	9	2	31	8	15	13
高校	2	1	12	5	1	4
回答なし	5	8	3	7	5	2

(人)

当事者（加害+被害）数は悪口・陰口が最も多く（107人）、暴力が最も少なかった（61人）。また、すべてのいじめ種類で加害経験者数が被害経験者数を上回っていた。

表4は、いじめ加害者と被害者に関して、いじめを経験した時期で分類したものである。回答が得られなかった者がいたものの、どのいじめ種類も、小学校、中学校、高校の順に経験数が多い傾向が認められる。悪口・陰口は、他のいじめ種類と比べて高学年でも経験数が多かった。

3.2 母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情の単回帰分析

単回帰分析の結果、母親の養護性と仮想的有能感、母親の養護性と自尊感情の間に有意な相関関係が確認された。母親の養護性が独立変数である場合、一単位上がると、仮想的有能感は-0.208程度低下し、自尊感

表5. 独立変数についての単回帰分析結果

	母親養護性	仮想的有能感	自尊感情
母親の養護性	標準偏回帰係数	-0.208**	0.192**
	標準誤差	-0.061	0.040
仮想的有能感	標準偏回帰係数	-0.158**	-0.05
	標準誤差	0.046	0.036
自尊感情	標準偏回帰係数	0.322***	-0.11
	標準誤差	0.068	-0.08

*** p < 0.001, ** p < 0.01, * p < 0.05, † p < 0.1

情は0.192程度上昇した。一方、独立変数が仮想的有能感の場合、一単位上がると、母親の養護性度が-0.158程度下がることが明らかになった。自尊感情が独立変数になる場合、一単位の上昇によって母親の養護性が0.322程度上昇することが分かった。自尊感情と仮想的有能感の間には有意な線形関係が見られなかった。つまり、母親が自分に対して養護的であったと認知している者ほど仮想的有能感が低く、自尊感情が高いことが明らかとなった。

3.3 母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情・いじめ経験の二項ロジスティック回帰分析

暴力、悪口・陰口、無視・仲間外れという三つのいじめタイプ別に、加害経験・被害経験・傍観経験・無経験の4種の経験を従属変数として、母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情との関連を分析した。各経験の変数に対して、「母親の養護性」モデル、「母親の養護性+仮想的有能感」モデルと「母親の養護性+仮想的有能感+自尊感情」モデルを設定した。加害経験の場合は「加害経験がない」、被害経験の場合は「被害経験がない」、傍観経験の場合は「傍観経験がない」、無経験の場合は「無経験でない(何らかの経験がある)」を基準カテゴリとし、それぞれの基準カテゴリに対し「加害経験がある」こと、「被害経験がある」こと、「傍観経験がある」こと、「無経験である」ことが母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情とどのような関係にあるかを表6-8に示した。

暴力について（表6）、加害経験と母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情の間に有意な関係は見られなかった。母親の養護性が低い場合は暴力の被害経験を持ちやすく、この関係は仮想的有能感を加えたモデルでも同様であった。自尊感情の効果を投入すると母親の養護性と仮想的有能感の効果の有意性が消失したが、係数の正負に変化がないことから、多重共線性の可能性は小さいと考えられる。すなわち、自尊感情が低い場合は、暴力の被害経験を持ちやすいと言える。母親の養護性が高い場合、暴力無経験であることが多かった。この効果は仮想的有能感と自尊感情を投入しても変わらなかった。また、仮想的有能感が低い場合、暴力無経験であることが多いことも明らかとなった。

傍観経験と母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情の間には有意な関係が見られなかった。

悪口・陰口について（表7）、母親の養護性が低い場合、加害経験を持ちやすいことがわかった。しかし仮想的有能感と自尊感情を投入するとこの関係の有意性は消失した。仮想的有能感が高い場合、悪口・陰口の被害経験をもちやすいことがわかった。自尊感情を投入したモデルにおいてもこの関係の有意性は変化しなかった。傍観経験と母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情の間には有意な関係が見られなかった。

無視・仲間外れについて（表8）、加害経験と母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情の間に有意な関係は見られなかった。仮想的有能感が高い場合、無視・

仲間外れの被害経験をもちやすいことがわかった。自尊感情を投入したモデルにおいてもこの関係の有意性は変化しなかった。また、自尊感情が低い場合、被害経験をもちやすいことも示された。仮想的有能感が低い場合、無視・仲間外れ無経験であることが多かった。自尊感情を投入したモデルにおいてもこの関係の有意性は変化しなかった。また、自尊感情が高い場合は無視・仲間外れ無経験であることも示された。傍観経験と母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情の間には有意な関係が見られなかった。

以上の二項ロジスティック回帰分析の結果を表9にまとめた。

表6. 暴力いじめについての回帰分析結果

暴力いじめ経験								
	いじめ加害経験あり		いじめ被害経験あり		無経験		傍観	
	標準偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	標準誤差
切片	0.297	0.720	0.514	0.753	-1.687	0.705	-0.825	0.819
母親の養護性	-0.030	0.018	-0.042 *	0.019	0.041 *	0.018	-0.015	0.021
切片	-0.385	0.912	-0.428	0.967	-0.679	0.881	-1.357	1.048
母親の養護性	-0.026	0.018	-0.037 †	0.019	0.036 *	0.018	-0.012	0.021
仮想的有能感	0.020	0.016	0.027	0.018	-0.03 *	0.016	0.015	0.018
切片	-0.498	0.994	0.551	1.073	-0.454	0.961	-1.758	1.143
母親の養護性	-0.028	0.019	-0.026	0.020	0.038 *	0.018	-0.017	0.022
仮想的有能感	0.020	0.016	0.031	0.018	-0.029 †	0.016	0.014	0.018
自尊感情	0.007	0.025	-0.061 *	0.027	-0.013	0.023	0.025	0.028
	基準カテゴリは「経験ない」		基準カテゴリは「経験ない」		基準カテゴリは「経験あり」		基準カテゴリは「傍観していない」	

*** p < 0.001, ** p < 0.01, * p < 0.05, † p < 0.1

表7. 悪口・陰口いじめについての回帰分析結果

悪口・陰口いじめ経験								
	いじめ加害経験あり		いじめ被害経験あり		無経験		傍観	
	標準偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	標準誤差
切片	1.072	0.685	-1.052	0.764	-1.567	0.760	-0.893	0.791
母親の養護性	-0.031 †	0.017	0.006	0.019	0.016	0.019	-0.009	0.020
切片	0.498	0.854	-2.139	0.975	-0.476	0.952	-1.221	1.007
母親の養護性	-0.028	0.017	0.013	0.019	0.010	0.019	-0.007	0.020
仮想的有能感	0.017	0.015	0.031 †	0.017	-0.032 †	0.017	0.009	0.018
切片	0.902	0.942	-1.583	1.060	-0.989	1.043	-1.186	1.097
母親の養護性	-0.024	0.018	0.019	0.020	0.004	0.020	-0.007	0.021
仮想的有能感	0.018	0.015	0.032 †	0.017	-0.033 †	0.017	0.009	0.018
自尊感情	-0.024	0.023	-0.034	0.026	0.031	0.025	-0.002	0.027
	基準カテゴリは「経験ない」		基準カテゴリは「経験ない」		基準カテゴリは「経験あり」		基準カテゴリは「傍観していない」	

*** p < 0.001, ** p < 0.01, * p < 0.05, † p < 0.1

表8. 無視・仲間外れいじめについての回帰分析結果

	無視・仲間外れいじめ経験							
	いじめ加害経験あり		いじめ被害経験あり		無経験		傍観	
	標準偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	標準誤差
切片	-1.220	0.874	-0.247	0.769	-0.504	0.679	-0.249	0.761
母親の養護性	-0.009	0.022	-0.023	0.019	0.008	0.017	-0.023	0.019
切片	-1.499	1.110	-1.978	1.006	0.510	0.862	-0.137	0.970
母親の養護性	-0.007	0.022	-0.014	0.020	0.002	0.017	-0.024	0.019
仮想的有能感	0.008	0.019	0.050 **	0.018	-0.029 †	0.015	-0.003	0.017
切片	-1.317	1.209	-1.180	1.096	-0.177	0.943	0.133	1.063
母親の養護性	-0.005	0.023	-0.004	0.021	-0.006	0.018	-0.021	0.020
仮想的有能感	0.008	0.020	0.053 **	0.018	-0.030 *	0.015	-0.003	0.017
自尊感情	-0.011	0.030	-0.051 †	0.027	0.042 †	0.023	-0.016	0.026
	基準カテゴリは「経験ない」		基準カテゴリは「経験ない」		基準カテゴリは「経験あり」		基準カテゴリは「傍観していない」	

*** p < 0.001, ** p < 0.01, * p < 0.05, † p < 0.1

表9. いじめ経験と母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情の関係のまとめ

		加害経験あり		被害経験あり		無経験		傍観経験あり	
		モデル (基準:加害経験なし)		(基準:被害経験なし)		(基準:無経験でない)		(基準:傍観経験なし)	
暴力	1	N.S.		母親の養護性が低い		母親の養護性が高い		N.S.	
	2	N.S.		母親の養護性が低い		母親の養護性が高い 仮想的有能感が低い		N.S.	
	3	N.S.		自尊感情が低い		母親の養護性が高い 仮想的有能感が低い		N.S.	
悪口・陰口	1	母親の養護性が低い		N.S.		N.S.		N.S.	
	2	N.S.		仮想的有能感が高い		仮想的有能感が低い		N.S.	
	3	N.S.		仮想的有能感が高い		仮想的有能感が低い		N.S.	
無視・仲間外れ	1	N.S.		N.S.		N.S.		N.S.	
	2	N.S.		仮想的有能感が高い		仮想的有能感が低い		N.S.	
	3	N.S.		仮想的有能感が高い 自尊感情が低い		仮想的有能感が低い 自尊感情が高い		N.S.	

モデル1は母親の養護性のみ, モデル2は母親の養護性+仮想的有能感, モデル3は養護性+仮想的有能感+自尊感情

4. 考察

4.1 結果の検討

本研究は,大学生の過去のいじめ経験と母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情の関係を検討した。二項ロジスティック回帰分析の結果, 母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情は, 主にいじめ被害経験といじめ無経験に関与することが明らかとなった(表9)。

母親の養護性は, 暴力の被害経験・悪口の加害経験・暴力の無経験と有意な関連を示した。すなわち, 母親の養護性が低い場合は暴力の被害経験と悪口の加害経験があり, 母親の養護性が高い場合は暴力に関わった経験がないと言える。母親の養護性は, 母から子への愛着, 暖かみ, 共感, 親密さなどを含んだ概念である。養護性の高い養育がいじめ加害のリスクを低下させる

こと(Rajendran et al. 2016: 188-195)や, 養護性の高い両親の子どもはいじめに関与しにくいこと(Wang et al. 2009: 368-375)が先行研究によって明らかにされている。また, 虐待やネグレクトを経験した子どもはいじめの被害者にも加害者にもなりやすいことが報告されており(Lereya et al. 2013: 1091-1108), 親から情緒的なサポートを得られなかった子どもは落ち込みやすく, いじめられやすい子どもになるという主張もある(内田 1993: 56-62)。本研究の結果はこれらの知見に合致するものであり, 母子関係の質がいじめ経験の危険因子にも防御因子にもなる可能性を支持すると言える。また, 暴力の無経験と母親の養護性の関係は仮想的有能感の効果を投入しても依然として有意であり, 暴力の無経験は仮想的有能感の低

さと有意に関連した。高い仮想的有能感には親との愛着関係の不全が関与すると考えられている（丹波・速水 2007）。母親と親密で安定した愛着関係を築けている場合、子どもは母親から適切に褒められ、時に叱られるであろう。それらの経験が自分自身の能力を評価する根拠となることで、他者軽視によって自分を高く評価する傾向、すなわち仮想的有能感が低くなると考えられる。したがって、母親の養護性が高く仮想的有能感が低い場合は、暴力に関与する危険性が低いと考えられる。

仮想的有能感の高さは、悪口・陰口の被害経験、無視・仲間外れの被害経験と有意な関連を示した。また、仮想的有能感の低さはすべてのタイプのいじめの無経験と有意に関連した。先行研究は、仮想的有能感が高い群が暴力、悪口・陰口、無視・仲間外れのすべてのタイプのいじめ加害・被害を経験しやすいことを明らかにしている（松本ほか 2009: 432-441）。本研究で示された仮想的有能感の低さとすべてのタイプのいじめの無経験の関連は、松本らの結果と表裏の関係にあると言える。仮想的有能感が低いいじめ経験がないことは、仮想的有能感が高ければいじめ経験を持ちやすいことを意味するはずである。しかしながら、本研究では暴力の加害経験または被害経験と仮想的有能感の間に有意な関連は確認されなかった。この点は松本らの結果との不一致点である。松本らの研究と本研究の対象者や質問方法の相違がこの不一致の原因の一つとして考えられるが、今後の研究による検証が必要である。一方、仮想的有能感の高さと悪口・陰口および無視・仲間外れの被害経験、無経験の関連は、先行研究にも一致する頑健な結果であると言える。特に無視・仲間外れの被害経験、無経験と仮想的有能感の関連は、自尊感情の効果を投入した場合も有意性が保持された。すなわち、無視・仲間外れの被害者は仮想的有能感が高く自尊感情が低い、無視・仲間外れの無経験者は仮想的有能感が低く自尊感情が高いと言える。この結果は、仮想的有能感が高く自尊感情が低い仮想型は無視・仲間外れの被害経験が多く、仮想的有能感が低く自尊感情が高い自尊型は無視・仲間外れの被害経験が少ないという先行研究の知見に合致する（松本ほか 2009: 432-441）。いじめ被害者の特徴は情緒不安定、

強い劣等感、低い協調性であり、特に無視・仲間外れの被害者は抑うつや不安の傾向があると言われている（Crick and Grotpeter 1996: 367-380; 古市ほか 1986: 175-194; 古市ほか 1989: 121-128; 岡安・高山 2000: 410-421）。これらの特徴は仮想的有能感の高い者の特徴にも一致するため、仮想的有能感が高いほど無視・仲間外れや悪口・陰口の被害者になりやすいという本研究の結果は妥当であると言える。

自尊感情の低さは、暴力の被害経験と有意な関連を示した。この結果は、暴力の被害経験者は被害経験のない者よりも自尊感情が低いという先行研究の知見に合致する（O'Moore and Kirkham 2001: 269-283, 吉川ほか 2012: 169-182）。いじめ被害によって自尊感情が低くなるのか、あるいは自尊感情の低さ自体がいじめ被害の危険因子なのかは明らかにされていない。しかし、低い自尊感情がパートナーによるドメスティック・バイオレンスの危険因子であるという報告があることから（Papadakaki et al. 2009: 732-749）、自尊感情が低いことに起因する何らかの行動が相手の攻撃性を誘発し、暴力的ないじめの被害に繋がる可能性が考えられる。

本研究の結果は、いじめの種類によって、母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情といじめ経験の関係が異なることを明らかにした。例えば、母親の養護性は暴力の被害経験に関与するが、悪口・陰口や無視・仲間外れの被害経験とは無関係であった。また、仮想的有能感悪口・陰口と無視・仲間外れの被害経験に関与するが、暴力の被害経験との関係は確認されなかった。いじめの種類によるこれらの不一致性について、現時点で明確な説明を与えることは困難である。しかし少なくとも、暴力、悪口・陰口、無視・仲間外れを一括りにいじめとして同一視すべきではなく、いじめられていると感じた者に実際に起こった出来事に即して事例別に対処を考えることの重要性が示唆される結果であると言える。

本研究では傍観者という立場も考慮したが、暴力、悪口・陰口、無視・仲間外れのいずれにおいても、傍観経験と母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情の間に有意な関連は見出されなかった。傍観者の特徴として、共感性が低いことや（西野 2015: 200）、友人や教

師との関係が希薄であること（吉川・今野 2011: 211-231）が指摘されている。したがって、母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情とは異なる別の要因が、傍観者の規定要因として働いている可能性が考えられる。

4.2 本研究の限界点と将来の課題

本研究には留意すべき限界点がある。本研究での調査対象が東北大学生のみであったことを考慮すると、本研究での分析結果は、東北大学生にとっての事実であるにすぎない。今後はより対象者を広げ、いじめ経験の実態を詳細に検討する必要がある。また、いじめ経験には回答者の学力や性格特性などの認知的心理的要因や、いじめ経験時の居住地域、親の職業、学歴、家族形態などの社会経済的要因も影響する可能性が考えられる。これらの指標も合わせた検討が求められる。なお、過去を振り返っていじめ経験や母親の養育を評価するという手続きの性質上、本研究で得られた母親の養育・仮想的有能感・いじめ経験の関係はあくまで相関関係である。母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情によっていじめ経験が変化するか、いじめ経験によって母親の養護性・仮想的有能感・自尊感情が変化するか、明確な因果関係を示すことはできない。小中高生を対象としたコホート調査によって、本研究の知見を更に深める必要がある。

4.3 結語

本研究は大学生・大学院生を対象とした質問紙調査により、母親の養護性と回答者自身の仮想的有能感、自尊感情と過去のいじめ経験の関係性を明らかにし、いじめという現象における母子関係の質と仮想的有能感、自尊感情の重要性を提示した。本研究の結果を学校現場におけるいじめ対策に反映させるためには、今後更なる研究の発展が必要である。

謝辞

本研究成果の一部は、東北大学キャリア支援センター主催・イノベーション創発塾にて発表致しました。本論文を作成するにあたりご指導賜りました羽田貴史名誉教授、田中泰光特任教授、工藤成史名誉教授、若林利男名誉教授に心より感謝申し上げます。また、本

研究の調査にご協力くださいましたTodd Enslen講師、Vincent Scra准教授、福田博之教授、理学研究科博士課程宮川智樹氏、そして回答者の皆様に心より御礼申し上げます。

参考文献

- 朝日新聞（2018a）「熊本で高3女子が自殺 いじめ原因か 28日県教委会見」, <https://www.asahi.com/articles/ASL5W56XML5WTLVB00L.html>（閲覧 2018/11/4）.
- 朝日新聞（2018b）「新潟の高校生自殺, 「SNS上でいじめ」 学校など会見」, <https://www.asahi.com/articles/ASL7D5T77L7DUOHB01J.html>（閲覧 2018/11/4）.
- 坂西友秀（1995）「いじめが被害者に及ぼす長期的な影響 および被害者の自己認知と他の被害者認知の差」, 『社会心理学研究』 第11巻, pp. 105-115.
- Brumariu, L.E. (2015) "Parent-Child Attachment and Emotion Regulation", *New Directions for Child and Adolescent Development*, vol. 148, pp. 31-45.
- Chen, F. R. and Raine, A. (2018) "Effects of harsh parenting and positive parenting practices on youth aggressive behavior: The moderating role of early pubertal timing", *Aggressive Behavior*, vol. 44, pp. 18-28.
- Crick, N. R. and Grotpeter, J. K. (1996) "Children's treatment by peers: Victims of relational and overt aggression", *Development and Psychopathology*, vol. 8, pp. 367-380.
- 古市裕一・岡村公恵・起塚孝子・久戸瀬敦子（1986）「小・中学校における「いじめ」問題の実態といじめっ子・いじめられっ子の心理的特徴」, 『岡山大学教育学部研究集録』 第71巻, pp. 175-194.
- 古市裕一・余公俊晴・前田典子（1989）「いじめに関わる子どもたちの心理的特徴」, 『岡山大学教育学部研究集録』 第81巻, pp. 121-128.
- Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K. and Tan, E. H. (2004) "Assumed - Competence Based on Undervaluing Others as a Determinant of Emotions: Focusing on Anger and Aadness", *Asia Pacific Education Review*, vol. 5, pp. 127-135.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子（2004）「仮想的有能感の

- 構成概念妥当性の検討」,『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学)』第51巻, pp. 1-8.
- 速水敏彦 (2011)「仮想的有能感研究の展望」,『教育心理学年報』第50巻, pp. 176-186.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005)「自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討」,『教育心理学研究』第53巻, pp. 74-85.
- 木野和代・高木邦子・速水敏彦 (2010)「仮想的有能感の形成に親子関係が及ぼす影響 (2) —有能感類型による検討—」,『日本心理学会第74回大会発表論文集』pp. 1025.
- 小西千秋 (2004)「海外におけるいじめの諸相」,坂西友秀・岡本祐子編著『シリーズ・荒れる青少年のこころ いじめ・いじめられる青少年のこころ—発達臨床的考察』北大路書房, pp. 19-25.
- 今野義孝・吉川延代・会沢信彦 (2014)「仮想的有能感と自尊感情はいじめにどのように関係するか—大学生における中学時代の想起による—」,『人間科学研究 (文教大学人間科学部)』第36号, pp. 123-131.
- Lereya, S. T., Samara, M. and Wolke, D. (2013) "Parenting behavior and the risk of becoming a victim and a bully/victim: A meta-analysis study", *Child Abuse & Neglect*, vol. 37, pp. 1091-1108.
- 毎日新聞 (2017)「文科省：学校いじめ最多32万件 小学校で急増 16年度」, <https://mainichi.jp/articles/20171027/k00/00m/040/003000c> (閲覧 2017/10/26).
- 松本麻友子・山本将士・速水敏彦 (2009)「高校生における仮想的有能感といじめとの関連」,『教育心理学研究』第57巻, pp. 432-441.
- 水谷聡秀・雨宮俊彦 (2015)「小中高時代のいじめ経験が大学生の自尊感情と Well-Being に与える影響」,『教育心理学研究』第63巻, pp. 102-110.
- 文部科学省 (2018)「平成29年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について (その1)」, http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/_icsFiles/afieldfile/2018/10/25/1410392_1.pdf (閲覧 2018/11/4).
- 森田洋司 (2010)『いじめとは何か—教室の問題, 社会の問題』中公新書, pp. 128-142.
- 西野泰代 (2015)「いじめ場面における傍観者の行動を規定する要因—個人特性を指標とした検討—」,『日本教育心理学会第57回総会発表論文集』pp. 200.
- 小川雅美 (1991)「PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究」,『精神科治療学』第6巻, pp. 1193-1201.
- 岡安孝弘・高山巖 (2000)「中学生におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス」,『教育心理学研究』第48巻, pp. 410-421.
- O'Moore, M. and Kirkham, C. (2001) "Self-esteem and its relationship to bullying behaviour", *Aggressive Behavior*, vol. 27, pp. 269-283.
- Papadakaki, M., Tzamalouka, G. S., Chatzifotiou, S. and Chliaoutakis, J. (2009) "Seeking for risk factors of Intimate Partner Violence (IPV) in a Greek national sample: The role of self-esteem", *Journal of Interpersonal Violence*, vol. 24, pp. 732-749.
- Parker, G., Tupling, H. and Brown, B. (1979) "A Parental Bonding Instrument", *British Journal of Medical Psychology*, vol. 52, pp. 1-10.
- Rajendran, K., Kruszewski, E. and Halperin J. M. (2016) "Parenting style influences bullying: a longitudinal study comparing children with and without behavioral problems", *The Journal of Child Psychology and Psychiatry*, vol. 57, pp. 188-195.
- Rigby, K. and Cox, I. (1996) "The contribution of bullying at school and low self-esteem to acts of delinquency among Australian teenagers", *Personality and Individual Differences*, vol. 21, pp. 609-612.
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the Adolescent Self-image*, Princeton: Princeton University Press.
- Takizawa, R., Maughan, B. and Arseneault, L. (2014) "Adult health outcomes of childhood bullying victimization: evidence from a five-decade longitudinal British birth cohort", *American Journal of Psychiatry*, vol. 171, pp. 777-784.
- 丹羽智美・速水敏彦 (2007)「有能感の4タイプと愛着スタイルの関連」,『日本心理学会第71回大会発表論文集』
- 豊田加奈子・松本恒之 (2004)「大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究」,『東洋大学人間科学総合研究

所紀要』創刊号, pp. 38-54.

内田玲子 (1993) 「いじめをうむ親子関係」, 『児童心理』
第47巻, 第12号, pp. 56-62.

Wang, J., Iannotti, R. J. and Nansel, T. R. (2009) “School
Bullying Among Adolescents in the United States:
Physical, Verbal, Relational, and Cyber”, *Journal of
Adolescent Health*, vol. 45, pp. 368-375.

Wolke, D., Copeland, W. E., Angold, A. and Costello, E. J.
(2013) “Impact of Bullying in Childhood on Adult
Health, Wealth, Crime, and Social Outcomes”,
Psychological Science, vol. 24, pp. 1958-1970.

山田奈保子・速水敏彦 (2004) 「仮想的有能感と性格検査
との関連—16PFとの関連から—」, 『日本パーソナリ
ティ心理学会発表論文集』第13巻, pp. 100-101.

山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 「認知された自
己の諸側面の構造」, 『教育心理学研究』第30巻, pp.
64-68.

吉川延代・今野義孝 (2011) 「中学生におけるいじめとス
トレスの関連性についての研究」, 『人間科学研究 (文
教大学人間科学部)』第33号, pp. 211-231.

吉川延代・今野義孝・会沢信彦 (2012) 「いじめの被害—
加害経験と自尊感情の関係—大学生を対象にした遡
及的調査研究—」, 『人間科学研究 (文教大学人間科学
部)』第34号, pp. 169-182.

付録：調査に使用した質問紙

過去の学校生活に関するアンケート調査

私たちは、小中高等学校におけるいじめの防止策提案を目指した研究を行っています。このアンケートは、あなたの過去の学校生活や家庭環境等についてお聞きするものです。頂いた回答は研究のみのために使用し、個人を特定しない形で発表します。答えにくいと感じられた質問は空欄のままでも結構です。

問1. あなたの年齢: _____ 歳

問2. あなたの性別: (1. 男性 2. 女性 3. その他) ※○をつけてください

問3. あなたの過去の学校生活についてお聞きします。小中高校での経験を思い出してお答えください。
あてはまる選択肢すべてに○をつけてください。

3-1. 殴る・蹴る・叩くなどの行為を

1. 他人にしたことがある 2. 周りに流されてしたことがある
3. 当時はそのつもりがなかったが、今思えばしていたと思う
4. されたことがある 5. 当時は気にしていなかったが、今思えばされていたと思う
6. することもされることもなかった 7. 周囲で起こるそのような行為を傍観していた
8. 自分の周りにそのような行為はなかった

●3-1で1～3を選んだ方: 相手はどのような存在でしたか。また、いつ頃の出来事ですか。

(例: 同級生、小学校5年時…等)

●3-1で4, 5を選んだ方: 相手はどのような存在でしたか。また、いつ頃の出来事ですか。

(例: 同級生、小学校5年時…等)

3-2. 悪口・陰口などの行為を

1. 他人にしたことがある 2. 周りに流されてしたことがある
3. 当時はそのつもりがなかったが、今思えばしていたと思う
4. されたことがある 5. 当時は気にしていなかったが、今思えばされていたと思う
6. することもされることもなかった 7. 周囲で起こるそのような行為を傍観していた
8. 自分の周りにそのような行為はなかった

●3-2で1～3を選んだ方: 相手はどのような存在でしたか。また、いつ頃の出来事ですか。

(例: 同級生、小学校5年時…等)

●3-2で4, 5を選んだ方: 相手はどのような存在でしたか。また、いつ頃の出来事ですか。

(例: 同級生、小学校5年時…等)

アンケートは次のページに続きます。

3-3. 無視・仲間外れなどの行為を

1. 他人にしたことがある 2. 周りに流されてしたことがある
3. 当時はそのつもりがなかったが,今思えばしていたと思う
4. されたことがある 5. 当時は気にしていなかったが,今思えばされていたと思う
6. することもされることもなかった 7. 周囲で起こるそのような行為を傍観していた
8. 自分の周りにそのような行為はなかった

●3-3で1～3を選んだ方: 相手はどのような存在でしたか。また、いつ頃の出来事ですか。

(例: 同級生, 小学校5年時…等)

●3-3で4, 5を選んだ方: 相手はどのような存在でしたか。また、いつ頃の出来事ですか。

(例: 同級生, 小学校5年時…等)

問4. 以下の項目のように感じる事がどれくらいあると思うか、1～5の数字を()内を書いてお答えください。

(1=全く思わない, 2=あまり思わない, 3=どちらとも言えない, 4=ときどき思う, 5=よく思う)

1. 自分の周りには気の利かない人が多い ()
2. 他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる ()
3. 話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い ()
4. 知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い ()
5. 他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる ()
6. 自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は、私の周りに少ない ()
7. 他の人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い ()
8. 私の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる ()
9. 今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない ()
10. 世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない ()
11. 世の中には、常識のない人が多すぎる ()

アンケートは次のページに続きます。

問5. あなたが16歳までのあなたの母親について、以下の態度や行動がどの程度あてはまるか、1～4の数字を()内に書いてお答えください。

(1=まったく違う, 2=どちらかと言えば違う, 3=どちらかと言えばそうだ, 4=非常にそうだ)

1. 暖かく、親しみのある声で話しかけてくれた ()
2. 私が必要とするほど助けてくれなかった ()
3. 情緒的には私に冷たいように思えた ()
4. 私の抱えている問題や心配に理解を示してくれた ()
5. 私に優しく、慈愛があった ()
6. 私と物事について語り合うのを楽しんだ ()
7. よく私に微笑みかけた ()
8. 私が必要としたり、欲していることを理解しているようには見えなかった ()
9. 私は求められていないと感じさせられた ()
10. 取り乱しているときに気分をほぐしてくれた ()
11. 私と多くは話さなかった ()
12. 私を褒めることはなかった ()

問6. 以下の項目の内容があなた自身にどの程度あてはまると思うか、1～4の数字を()内に書いてお答えください。

(1=強くそう思わない, 2=そう思わない, 3=そう思う 4=強くそう思う)

1. 私は自分自身に大体満足している ()
2. 時々、自分は全くダメだと感じることもある ()
3. 私にはけっこう長所があると感じている ()
4. 私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる ()
5. 私には誇れるものが大してないと感じる ()
6. 時々、自分は役に立たないと強く感じることもある ()
7. 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている ()
8. 自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う ()
9. よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう ()
10. 私は、自分のことを前向きに考えている ()

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。最後に、記入漏れがないかご確認ください。

<研究組織・お問い合わせ先>

東北大学高度イノベーション博士人財育成ユニット イノベーション創発塾PBL実践

研究責任者: 羽田貴史 (hata@m.tohoku.ac.jp)

共同研究者: 田中泰光 (yasumitsu.tanaka.b6@tohoku.ac.jp)

研究実施担当者: 松平泉, 蘇亮, 前田瑞穂, 高木聖実, 宮川智樹

お問い合わせ窓口: izumi.matsudaira.t8@dc.tohoku.ac.jp (担当: 松平泉)

